投映法を用いたレジリエンス測定を試み

—KJ 法によるレジリエンス・オリエンテーションの分類—

○平野真理・綾城初穂・能登眸

(東京大学大学院教育学研究科)

キーワード：レジリエンス、投映法、KJ 法

A Study of the Measurement of Resilience Using a Projective Technique: Classification of the Resilience Orientation by KJ-Method.

Mari HIRAO, Hatsuho AYASHIRO and Hitomi NOTO

(Graduate School of Education, the University of Tokyo)

Key words: resilience, projective technique, KJ-method

目 的

レジリエンスは、傷つきや落ち込みからの心理的回復や、困難な状況での心理的適応を示す概念である。レジリエンスを導く性格特性を測定する質問紙はこれまでに多く開発され、それにより個人が困難な状況に陥った時のレジリエンスが予測されてきた。しかしながら、同じレジリエンス特性を持つ者が、結果的に同じように心理的適応に至ったとしても、その過程で困難状況にどのように働きかけ、どのように変化させたかは様々である。そのため、何かが物理的・心理的に満たされない状況においてどのような力動を働かせるのかという点も、特性とは別に測定されるべきものであると考えられる。しかしこのような力動は、具体的な状況における判断として表れるため、恒常的な特性を測ろうとする従来の質問紙法では測定が困難である。そこで本研究では、個人が落ち込み状況においてどのように対応するのかを投映法によって測定し、レジリエンスの力動を探索的に検討することを試みた。

方 法

1. 対象 2014 年 3 月に、ネット調査会社を通して 20 歳～30 歳の大学生 500 名、社会人 500 名 (男女同数) に調査を行った。平均年齢は 24.08 歳 ($SD=3.61$) であった。

2. 調査内容 P-F スタディにおけるプラストレーションの 6 分類 (欠乏・喪失・葛藤 [要求がどのように満たされないか] × 外部的・内部的 [満たされない要因]) (Rosenzweig, 1938) に基づき、一般場面と対人場面について 12 の落ち込み場面を作成した (図 1)。これに対し

図 1 落ち込み場面の例

て、絵の中の人物の気持ちがどうしたら楽になるか、一言アドバイス (30 字以内) を自由記述で回答するように求めた。

3. 分析 心理系大学院に所属する臨床心理士 3 名で、KJ 法を用いて自由記述の分類を行った。今回は 12 場面中、場面 1「お金がなくて先が不安 (欠乏・外部的)」と場面 2「努力しても目標や夢に近づかない (欠乏・内部的)」の 2 場面のみを分析対象とした。分析では回答者の自由記述を一切片と見なし、類似した切片を集めてサブカテゴリを形成した。その後、類似したサブカテゴリを統合しカテゴリを形成した。これらの作業を場面 1, 2 で行った上で、カテゴリ間の関係から全体の構造を推測した。

結果と考察

1. 場面 1 の分類

1000 個の切片を分類した結果、43 のサブカテゴリおよび 18 のカテゴリが形成された。最も切片の多かったカテゴリは「行動する(395)」であり、次いで「安心する(136)」「考えない(91)」「価値の矮小化(84)」が多く見られた。

2. 場面 2 の分類

分類の結果 46 のサブカテゴリが見られ、それらを場面 1 で見られたカテゴリを参照しながら統合した結果、場面 1 と同じ 18 のカテゴリに加え、新たに 2 つのカテゴリ「方向を変える」「許される」が見出された。最も切片の多かったカテゴリは「行動する(136)」であり、次いで「あきらめない(128)」「考えない(110)」「認められる(86)」が多く見られた。

3. レジリエンス・オリエンテーション (表 1)

各カテゴリの関連性を検討したところ、何かが物理的・心理的に満たされない状況において“どのような回復を志向するか”という点で、【復元】【受容】【転換】の 3 つのグループに分類することができた。【復元】は、元の状態に戻ろうとする、もしくは目指していた水準に達しようとする力動である。【受容】は、満たされない状態のままに留まろうとする力動である。【転換】は、満たされない状態の意味づけや価値を変えようとする力動である。これら 3 つのグループはすべて、個人のレジリエンスの志向性を表していると考えられたことから、レジリエンス・オリエンテーションと名づけられた。

さらに、これら 3 つのレジリエンス・オリエンテーションはそれぞれ“どのように達成するのか”という点で、【一人で】(一人で達成する)【他者と】(他者により達成される)【世界から】(世界からもたらされる)の 3 つの手段に分けられることが見出された。

従来のレジリエンス研究では性格特性に焦点が当てられてきた一方で、レジリエンスにおける個人々の力動は検討されにくかったといえる。レジリエンスにおける行動の個人差を検討しようとする場合、過去のネガティブな出来事にどのような対処行動をとったかを尋ね、その適応性を評価することが多かった。しかし、実際の対処は状況依存的な要素が大きいため、従来のような回顧法を用いた調査では、個人間の力動の比較は困難である。本研究では、投映法を活用することにより、レジリエンスの志向性と手段という観点から個人のレジリエンスの力動が整理でき可能性を示した。今後、力動の観点からの個人差理解、および、個人のレジリエンスを予測できる可能性を検討していくことが課題である。

表 1 レジリエンス・オリエンテーションの分類とカテゴリ

		達成の手段		
		一人で	他者と	世界から
オリ レ ジ エ ン ス ・ オ リ エ ン テ ー シ ョ ン	復元	行動する 手立てを考える あきらめない	頼る	期待する
	受容	考えない 受容する あきらめる	相対化される 共感される 許される	安心する 委ねる
	転換	捉え方を変える 方向を変える	褒められる 認められる	価値の矮小化 価値の逆転